

法医植物学者  
枉葉柚梨の推理ファイル  
花葬犯と謎の画家メメント  
玄武聡一郎 Soichiro Genbu



アルファポリス文庫

## プロローグ

花の絵を描いた。

植物の絵を描くときは、何も考えないことが肝要だ。つい今朝がたに開花した花卉。いままさに咲こうとしている、ふつくらとした蕾。か細くも自立した薄茶けた葉茎。葉の表面にはきめ細かな葉毛がびっしりと並び、霧吹きから受けた水滴を柔らかに浮かせている。

数億年の時を経て体系が確立された被子植物、その基本構造に無駄はなく、洗練されている。時に人は、その姿を見て美しいと形容することもあるだろう。

けれど、それ以上の何かが湧きあがることはない。

洗練されたフォルムは、進化の過程を経て形作られた結果にすぎない。

適者生存、自然選択。自然に適した者が生き残り、そうでないものは消えていく。自らの意思があるわけでもなく、流されるままに現在の形に至っただけ。有機物でありながら、無機物のように無機質。ただそこに、「在る」というだけの生物。

だからいい。だから好きだ。

たとえ周囲がどれだけ騒がしかろうとも、誰が笑おうとも、誰が泣こうとも、愛する者同士が恋の情事を始めようとも、くだらない諍いがこじれようとも、戦争が起ころうとも。

そして、そう。

たとえ今、目と鼻の先に、まごうことなく息絶えている女性の死体があろうとも。

植物は変わらない。ただそこに在り続ける。

花は咲いている。蕾は膨らんでいる。葉茎は立ち、葉は水を弾いている。

その様を、ただ描く。スケッチブックの表面に、黒鉛の線が軌跡を残す。

ふと、顔をあげる。モザイク柄の窓の向こうで、サイレンの音が鳴っていた。

朝早く学校へ行く準備をする者たちが、会社への道中を行き急ぐ者たちが、混ざり合い、すれ違う、静かにうるさいこの時間に、確かに生じた警戒の音。

心は少しざわついた。けれど、この場からは動かない。手を止めることもない。

くぐもったサイレンと、黒鉛の先端が削れる音だけが、部屋の中に響いている。

時間がない。だから急こう。

植物の絵を描くときは、何も考えないことが肝要だ。

つい今朝がたに開花した花卉。いままさに咲こうとしている、ふっくらとした蕾。か細くも自立した薄茶けた葉茎。葉の表面にはきめ細かな葉毛がびっしりと並び、霧吹きから受けた水滴を柔らかく浮かせている。

ただひたすらに手を動かして。

花の絵を、描いた。

## 第一章

かつ井が好きだ、と僕——神目帚彦は主張した。

白米ととんかつ、たまねぎに卵、それに三つ葉。構成する要素は複数あつて、一概にどれが重要かとは言い切れないのだけれど、僕は取<sup>あ</sup>えて出汁の重要性を説<sup>と</sup>いていきたい。なぜかと言えば出汁こそが、かつ井全体のクオリティを最も大きく変化させると考えるからだ。料理というのは最後に入れた材料によって全体の味が決定する。かつ井の場合は、白米、とんかつ、溶き卵、出汁の順番に載せられる。溶き卵と出汁は混ざり合っているけれど、卵の風味に出汁の味が負けるわけもない。出汁がまずければかつ井もまずい。出汁がうまければかつ井もうまい。要するにそういう話だ。

「というわけで駅前蕎麦屋のかつ井が食べたいんですけど、セットにしても大丈夫ですか？」

「ダメに決まってるだろ。取り調べ中だぞ」

「任意同行ならかつ井食べられるってネットに書いてありました」

「確かにそうだ。そうだが、そういうのはこっちから提案するものであつて、断じてそっち側からリクエストするものじゃねえんだよ」

そうなのか。せっかくあふれんばかりのかつ井愛をぶつけたのに、残念だ。

「じゃあ、もう話すこともないので帰っていいですか？」

「荻<sup>おぎ</sup>、こいつ舐<sup>な</sup>めてんぞ。お前からもなんかびしつと言つてやれ」

目の前の刑事が（たしか榛原とかいう名前だった）後ろの刑事に向かって声をかける。僕たちの話を聞きながら逐一PCのキーボードに指を走らせ、記録を残していたインテリな見目の刑事が、眼鏡のリムを指で押し上げながら重々しく口を開いた。

「かつ井のうまい蕎麦屋なら、商店街にいい店がありますよ」

「てめえ、また話聞いてなかったな。自分の世界に浸<sup>ひた</sup>るのも大概にしとけよ」

どうやらインテリっぽいのは見た目だけらしい。普段からこんな感じなんだろうか。だとすれば榛原刑事の気苦労は計り知れない。僕は若干の同情を込めて言う。

「苦労してますね」

「はっ倒すぞボケ」

心配しただけなのに酷<sup>ひど</sup>い言われようだ。

「もう一度聞くぞ。最初からだ」

仕切り直しとばかりに、榛原刑事が改めて机の上に置かれていた写真を指でつまんだ。僕はもう何度繰り返し返されたか分からないやり取りに内心うんざりしながら写真を見た。

写っているのは年齢三十前後と見られる女性だ。黒い髪をサイドテールにまとめ、はにかみながらカメラに向かってほほ笑んでいる。

「名木田美鈴、二十八歳。今朝、アパートの自室で亡くなっていることが確認された。左手首に裂傷が認められ、ぬるま湯を張った洗面器に浸されていた。死因は出血多量によるショック死。死体の周囲には植木鉢が複数置かれていて、大量の花に囲まれた状態で死んでいた。そして」

榛原刑事の目が、鋭く僕を見つめる。

「死体と花の前に、お前が座っていた。間違いないな」

「二点、訂正があります。花じゃなくてワスレナグサ。座っていたんじゃないくて、スケッチしていたんです」

「お前がやったんだろ」

僕の言葉には耳も貸さず、榛原刑事はそう断言した。この場合の「やった」には「殺った」という字が当てられるのだろう。そんなことを頭の隅で考えながら、僕は首を横に振った。

「やってないです」

「じゃあなんですぐに通報しなかった」

「スケッチしてたので」

「っざけんな！」

派手な音を立てて机が揺れる。取り調べが始まって既に数時間が経過している。なかなか口を割らない僕に、榛原刑事は相当いら立っているようだ。しかし残念なことに（そして榛原刑事にとつては不幸なこと）、僕は一ミリ足りともふざけてなんかいないのだ。警察に連れてこられ、取調室に入ってからの方、僕は本当のことしか口にしていない。

「目の前に死体が転がってんだぞ！ そんな状況でのんきに花の絵なんて描くやつがいるわけねえだろうが！」

ぐいっと榛原刑事のいかめしい面が近づいてくる。脂ぎった額に刻まれたしわの数まで数えられるくらいの距離だ。ヤニ臭いし、汗臭い。最悪だ。

「いいか、よく聞け。ガイシャの部屋からはてめえの痕跡がわんさか見つかったんだよ。指紋、毛髪、何かとペアでそろえた食器類。右手に握ったナイフからは、べったりお前の指紋が検出されている。自殺にでも見せかけようとしたんだろうが、処理が雑すぎんだよ。警察なめんなよボケが！」

そう興奮せずに落ち着いて聞いてくださいよ。自殺に見せかけようとしたんじゃないくて、本当に自殺なんです。僕が彼女のアパートに着いたとき、彼女はすでに死んでいたし、それ以上のことは知りません。それに一枚目のスケッチを描き終わった後、ちゃんと通報したじゃないですか。もし僕が犯人なら、そのまま逃げちゃうと思いませんか？ よって僕は犯人じゃありません。以上、この話はこれで終わり、解散！

……ダメだな、こんなこと言ったら火に油を注ぐだけだ。もう何度も説明したし、いつになつたら理解してもらえののだろうかため息も出るけれど、諦めずにもう一度、ちゃんと弁明してみよう。

「さっきも言いましたけど、彼女に頼まれてたんです。『私が死んだら、この花をスケッチして欲しい』って。だから僕はその通りにしました。彼女の家に着いて死体を確認したら、まずスケッチブックを開きました。それから一番スケッチしやすい場所を探して、ちょうど窓の傍に人ひとり分座れるスペースがあったので、そこに座りました。あとはいつもの通り、できるだけ平常心でスケッチを——」

「誰が信じるかそんなホラ話！」

まだ最後まで話してないんだけどなあ……

「自分が死んだら花をスケッチして欲しいだ？ そんな意味分かんねえこと頼むやつ、いる

わけねえだろ！」

「だから」

僕はそこで言葉を切った。これ以上何を言っても無駄な気がした。

そんなやついるわけがない。

常識的に考えてあり得ない。

取り調べが始まってこの方、ずっとそればかりだ。自分の中にある短い物差しでしか物事を測れないような人間に、彼女のことを理解してもらえとは思えなかった。

「ちょっといいですか」

このままでは埒が明かないと判断したのだろうか。萩と呼ばれた、もう一人の刑事が声を上げた。榛原刑事とは対照的に、きっちり七三に整えられた髪にパリッとしたスーツを着こなしたエリート商社マンのような出で立ち。こんなオンボロ取調室より、全面ガラス張りのオフィスビルが似合いそうな人だ。

「私たちは、なにもあなたの言っていることを頭から否定したいわけじゃありません。ただね、どうにも引つかかる点が多いんですよ。たとえスケッチするにしても、警察に通報してからでもよかったのではないですか？ 知り合いの死体を前にして、やけに冷静だった点も気にかかります。このあたりをしつかり説明してもらわないと、『警察が到着するまでの間に、

証拠を隠滅していたのではないか」と疑ってしまっただけですよ」

「荻刑事が言い終えると、「そういうことだ」と榛原刑事が仰々しく頷く。その偉そうな態度に若干腹が立ったけれど、せっかく荻刑事が歩み寄ってくれたんだ。こちらの刑事の方が、まだ話が通じそうだし、僕も少し詳しく説明することにする。」

「ワスレナグサの横に、自分の死体を添えて欲しいって言ってたので」

「死体を添える」

「はい。だから警察も救急車も呼べなかったんです。彼女の死体が回収されちゃうので」

「彼女とはどういう関係か、もう一度説明してもらえますか？」

「深い仲じゃありませんよ。初めて会ったのは三か月ほど前ですかね。それ以来、週一、二回くらいのペースでアパートに。いつも長居はしませんでしたけど」

「なるほど。理解しました」

「理解できるか？」

眉間にしわを寄せる榛原刑事とは対照的に、荻刑事は何度もうなずきながら宙を仰ぎ見た。  
「ある程度ロジックは通っていますからね。精神的に病んでる人間は、自分が死んだらこうして欲しい、という託し方をよくします。特に生前報われなかった人間に多いですね。死という行為を、自分の願いをかなえてもらうためのツールとして使うパターンです。彼との出

会いが最近過ぎるのは気にかかりますが……とはいえ名木田美鈴は養子です。もしかしたら家庭環境に何かトラブルでも——」

「おい、喋りすぎだ。授業参観じゃねえんだぞ」

「あすみません、つい」

心ここにあらず、といった調子で荻刑事が言う。聡明だが、考えに没入すると他人への配慮がなくなる人なのかもしれない。人間関係で摩擦が多そうな人だが、取り調べを受ける側としては榛原刑事のように声を荒らげない分、ずっとマシだ。

「しかし仮にそうだとしても、まだ完全に納得はできませんね。だってこのスケッチには」ジップロックに入れられたスケッチブックを、荻刑事の手がそと撫でる。

「花『しか』描かれていない。彼女の願い通り、彼女の死体を添えるのであれば、名木田美鈴の死体も描くべきではないですか？」

実に理にかなった質問だった。僕はすぐに答える。

「それも彼女に頼まれたんですよ。自分の姿はスケッチしないで欲しいって。だから花だけ描きました」

「名木田美鈴はどういう意図でその要求を？」

「さあ、知りません。よっぽど大切な花だったんじゃないですか」

「では、なぜそれをあなたに頼んだのですか？　あなたと名木田美鈴は、つい数か月前に出会ったばかりなのでしょう？」

「さあ、知りません。よっぽど僕のことを気にいったんじゃないですか」

荻刑事の顔が少し曇る。申し訳ないけれど、知らないものは知らないのだ。知らないことを知ったように語るよりも何倍もマシだと、僕は信じている。

「……つまり、こういうことですか？　自分が死んだら花を近くに置いておくから、その花だけをスケッチして欲しい。それが名木田美鈴の願いだった。あなたは彼女の願いを聞き入れて、スケッチした。死体にも動じず、警察にも通報せずに」

「その通りです」

「ふむ。だからさつき、死体『を』添えるという独特な言い方をしたのですね。普通なら、死体『に』添えると言うところを。あくまであなたたちにとっては花が主体だったわけだ」

「そうかもしれません」

「証言に一貫性がありますね。どうします、榛原さん？」

「バカバカしい」

黙って聞いていた榛原刑事が吐き捨てるように言った。貧乏ゆすりの強さがどんどん増していたので、そろそろかなとは思っていた。

「やれ彼女が言っただけの、やれ彼女にお願いされただけの、おんなじことばかり言いやがって。死体が喋れねえのをいいことに好き放題か？　ああ？」

僕はぼんやりと、どこかで読んだ記事を思い出していた。冤罪<sup>えんざい</sup>についてのコラムだった。無実の人間が、やってもいない罪の告白をしてしまうのは、繰り返される尋問に耐えられないからだ、そこには書いてあった。どれだけ屈強な人間も、「否定」と「無意味な時間」に対しては耐性が低い。自分の証言の全てを否定され、意味もなく同じ質問を繰り返されると、その地獄から抜け出すために嘘の真実を語ってしまうのだと。

今の僕が、まさにその状態だった。ここまで頭ごなしに否定され続けると、いい加減精神が参<sup>ま</sup>ってきていた。もう一度かつ井ネタでもぶち込んで、全部煙<sup>けむり</sup>に巻いてやろうか。

「そもそもお前の行動はおかしいんだよ。ガイシャの死亡推定時刻は早朝五時から七時。その時間、お前は何してたって？」

「スケッチしてました。そこに描いてありますよ」

「これですよ」

荻刑事が手袋をはめてスケッチブックを取り出し、一枚めくる。すっかり重要証拠扱いだ。まいったね。

「これはなんという花ですか？」



「知りません。あまり植物の名前に詳しくないので」

「どこで描いたんです？」

「横之原町です。駅までの通り道でたまたま見かけて、綺麗だったので描きました」

その花は、誰かの家の玄関先で静かに咲いていた。色とりどりで、形もユニーク、普段公園や川岸で見かけない花だったので、すぐに目に留まった。その時の場所も、時間も、情景も、つぶさに思い出して語ることができる。ただ――

「それが本当なら、時間的に犯行は不可能ですね。どれだけでも電車を乗り継いでも、片道二時間はかかります」

「本当なら。絵なんて証拠にならん」

榛原刑事の言わんとすることは分かる。写真と違い、絵には時間のデータが残らない。写真の情報ですら偽装できる昨今、なんの変哲もないただのスケッチがアリバイの証明になるとは、僕も思っていないかった。

「あなたの言い分はこうです。起床が六時。そのあと身支度を整え、六時半に家の周りを散歩。綺麗な花を見つけたのでスケッチ。十五分ほど描き終え、その足で駅に向かい、二時間ほどかけてガイシャの家に到着。着いたのは九時十分。ガイシャの死体を発見し、スケッチを始める。一枚目のスケッチが描き終わった時点で通報、その十分後、警察が到着し身柄

を確保される。警察を呼ばずにスケッチを始めたのはガイシャの生前の頼みだったから。間違いないですね？」

「はい、その通りです」

「仮にですよ？ ガイシャに関することについては、あなたの言っていることが正しいとしましょう。おかしい思想をもって奇天烈な死に方をする人間は、私もそこそこ見てきましたから」

やっぱり結構失礼だな、この人。

「だとしても、やっぱりこれは無理がありますよ。この二枚のスケッチ。どちらも手掛けた時間が十五分程度ですよね」

「そうです」

「完成度が高すぎます」

「ありがとうございます」

「褒めてません。いや、褒めてるんですけど、そういうことではなくて」

萩刑事がスケッチブックをめくる。

「こんなの、普通に考えて数時間はかかる描き込み方ですよ。これを十五分で描けるとは到底思えません。あなた、美大生ですか？」

「いえ、ただの大学生です」

「普段からこれくらいの速度で描けるんですか？ 例えば、今」

「今は無理ですね」

「どうして」

「ここには植物がないので」

僕の筆が速いのは描画対象が植物の時だけだ。他の絵ではあの速度を出すことはできない。それは僕がここ数年、植物の絵ばかりを描いてきたからなのだけど、別にわざわざ言う必要はないだろう。言ったところで、事実が変わるわけでもない。

「植物専門の絵描きということですか……。まるでメモントですね」

「メモント？」

「おや、ご存じないですか？ ネット上で活動している、界限<sup>かいがい</sup>では有名な絵描きですよ。特に海外では熱狂的なファンが多くてですね。彼の描いた絵は最高百万ドルで落札されたこともあるんですよ。おっと、彼というのは正しい三人称ではありませんね。なにせメモントは正体不明。素顔も性別も年齢すらも明かしていないんですから」

「ずいぶん詳しいんですね」

「いやあ、恥ずかしながら私もメモントのファンでして。画集を買ったこともあるんですよ。

見ます？ 写真フォルダにも何枚か画像が——」

いそいそと荻刑事がスマホを取り出そうとしたところで、榛原刑事の分厚い手が机を叩いた。

「お前の個人的な趣味の話はどうでもいい！」

血管がプチギレそうな剣幕に、思わず身がすくむ。一方の荻刑事はというと、不服そうに唇を尖<sup>とが</sup>らせながらスマホをポケットにしまっていた。結構図太い人なのかもしれない。

「いいか神目帯。お前の言ってることは全部でたらめだ！ なんの根拠も証拠もない話を警察がホイホイ信じると思つたのか？ バカにすんじゃねえ！」

「いや、だから——」

「いいか、俺が今からこの事件の真相を話してやる！ まず、その朝一に描いたとかいう絵は予め準備していたもの。お前は今日の朝、ガイシャの家<sup>あか</sup>にいた。そしてガイシャを殺し、そのあと死体の周りに花を並べ、じっくり絵を描いたんだ！ そうだろう！」

「そうじゃなくて——」

「殺した理由は痴情<sup>ちじょう</sup>のもつれ、絵を描いた理由はお前がそういうことに興奮する変態だからだ！ お前みたいなのは——とした顔をしたやつはな、ゲームとか漫画の世界と現実の区別がつかなくなつて、おかしい行動を起こすんだよ！」

ついに僕の話は完全に遮られるようになってしまった。榛原刑事の中でストーリーは出来上がっているらしく、僕はその配役通りに動かないために怒られている。小学校の劇の練習みたいだ。

怒声と机を乱暴にたたく音が、ガンガンと鼓膜を打ち鳴らす。自分は何も悪いことをしていないという確信があるけれど、それでも至近距離で怒鳴られ続けるのは、それなりに心にくるものがある。自然に視線は下を向き、体は身を守るかのように、自然に縮こまっていく。意識は段々と現実から離れ、思考の海を泳ぎはじめる。

彼女の死体を見つけたとき、すぐに警察に通報しなかったことに未練はない。

何よりもまずスケッチブックを取り出して、鉛筆を走らせたことに後悔もない。

正しいことをしたという自負がある。

自分は間違っていないという確信もある。

だけど、今の状況は少し——ほんの少しだけ、辛いかもしれない。

「適当にべらべらべら嘘ばかり並べやがって！ こっちだつて暇じゃねえんだ！ さっさと全部吐きやがれ！」

「あーれーいいのかなー、天下の国家公務員様がそんなあらつばい取り調べの仕方して。い

くらここが絶妙に田舎で閉鎖的で警察の横暴が見逃されがちだからって、さすがに任意同行で連れてきただけの相手を変態の犯人呼ばわりするのはいかなものかと思えますけどねえ」

取調室の入口に、いつの間にか一人の女性が立っていた。

無地の白いトップスにハイウエストのレザースキニー。まるでバイクにでも乗って来たかのようなスタイリッシュな服装と、重力に逆らわないまっすぐ長い黒髪。街に出れば数多の目線を吸い寄せそうな、極めて攻撃的で整った顔立ち。

壁に寄りかかって腕を組み、挑戦的な目つきで……けれど、やけにけだるげな声音で女性と言う。

「そういう前時代的な取り調べばっかりしてるから、なかなか昇格できないんじゃないですか？ 榛原刑事つたらもうすぐ四十なのに、昇進の噂の一つもないって署内でもっぱらの評判だそうですね。くく、ウける」

「……荻、つまみだせ」

「はい」

榛原刑事に指示されて、荻刑事が席を立った。しかし。

「これはこれは萩刑事。こんな旧時代の遺物とコンビを組まれて、さぞかし不服なことでしょうねえ。同期のみんなは警察庁で華々しく活躍していて、この前も世間を騒がせた連続殺人事件を解決したらしいですよ。あ、失礼、『元』同期でしたっけ」

「……お引き取りを」

「お断りします。私は無知蒙昧なお二人に代わって、一生解決しそうもなく、なんなら今まさに冤罪者を出さんとしている愚かな状況を打破するべく、こうしてわざわざ警察くんだりまで足を運んだんですからねえ。歓喜のあまり足が震えて仕方がないでしょう？ まるで真冬の北海道にいる生まれたてのエゾジカのような。そのままひざまずいて拝んでくれた方がいいんですよ。想像しただけで実に愉快だ」

「すみません、ここは関係者以外立ち入り禁止ですので……榛原さんがキレる前にお引き取りを——」

「おいこら、紅葉あー！」

耐えられんと言わんばかりの怒声と共に、榛原刑事が立ち上がる。

「さつきから黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって。喧嘩売ってんのか？ ああ!？」

「喧嘩なんて売ってませんとも。私はただ、事実を述べているまでで。それを『喧嘩を売っている』と捉えるのであれば、それはそちら側の問題では？ 何かお心当たりでもあるんで

すかあ？」

「こんのクソ女……毎度毎度偉そうに。いい加減にしねえと——」

「どわああああああ！ 紅葉さん何してるんですかああああ！」

この場にそぐわない素っ頓狂な叫び声をあげながら、また一人、女性が部屋の中に現れた。今度の女性はポニーテールに丸眼鏡、ぶかぶかのパーカーに色あせたジーンズ。なんていうか、生活感のある人だった。夕方のスーパで会いそうな感じ。

「何ってご挨拶だよ、八重野君。私は礼儀と仕来りを重んずる人間だからね、挨拶はコミュニケーションの基本だろう？」

「出会い頭に言葉の鈍器で殴りかかえることを挨拶とは言いません！」

そう言うのと八重野と呼ばれた女性は、ショルダーバッグをがさがさと漁ると、一枚の紙を取り出した。

「いつもウチの紅葉がすみません！ これ、署長の許可証です！ いつものやつです！ お収めください、萩刑事！」

広げられたA4の紙には「紅葉ちゃんの話聞いてあげて☆ みんなの署長より」と書いてあった。なんだこのゆるゆるの文言。こんなので部外者が事件に関われるわけ——

「はい、確かに受け取りました。次からは先に見せてくださいね」

「すみません。紅葉さん、いつの間にかいなくなって……」  
いいんだ。これで許されるんだ。

見れば、一番ネックになりそうな榛原刑事すら渋い顔をしながらも頷いている。すごいな署長の許可証。水戸黄門の印籠みとうもん いんろうみたいだ。

「ちっ、許可が出てるなら早く言いやがれ」

「言いましたがあ？」

「言ってねえよ！」

「言っていないそうだ八重野君。もっとしっかりしてくれたまえ」

「え、私ですか!？」

「ああああ、もういい。ぎゃあぎゃあ騒ぐな、やかましいな」

怒りを吐き出すタイミングを失ったのだろう。不服氣に大きなため息を一つ吐くと、榛原刑事はどさりとパイプ椅子に腰かけた。

「さっさと済ませろ」

「言われなくとも、こんな陰気臭いところに長居したくありませんとも」

そう言うときレザースキニーの女性は、僕の目の前に歩を進めた。よく見ると髪の内側は深緑色だった。彼女が歩き、髪が揺れるたびに、落ち着いた深い緑色の髪がチラチラと顔をの

ぞかせる。インナーカラーってやつか、かつこいいな。

「さて、何から話しはじめたものか。おそらく君は突然の急展開に驚いていることだろう。分かるとも、鳩はとが豆鉄砲まめてっぽうを四方八方から打ちまくられて阿鼻叫喚あびきょうかん、みたいな顔をしているからね」

「鳩になんの恨みが」

思わず突っ込んでしまったが、彼女の言う通りだ。正直言って、何が起きているのかこれっぽっちも理解できない。この人が誰なのか、どうしてここに来たのか、なぜ僕に会いに来たのか——到底分からないことだらけなのだけだ。

それでも一つ、たしかなことは。

「まずは挨拶から。私の名前は紅葉柚梨もみぢ ゆかり、法医植物学者だ。聞きたいことは色々あるだろうけど、今はこれだけ理解すればいい。私がここに来た理由はただ一つ」

遅々として進まなかった状況が、ようやく動き出しそうだ。

「君を助けに来たよ、神目帯君」

\*

「……今、所持金千円くらいしかないですけど」

「助けに来たって言ってるのになんで金銭をむしり取られる心配してるんだ。私たちが野伏<sup>ふし</sup>か山賊<sup>さんぞく</sup>にでも見えているのか？」

仕方がないだろう。助けに来てくれたスーパーマンに出会ったというよりは、対価を要求してくる悪魔に出会った感覚に近い。そんな人間に「助けてやる」と言われても、「今からお前を助ける代わりに身ぐるみを剥<sup>は</sup>ぐ」と宣言しているようにしか聞こえない。

「まあでも、その図太さはいいいね。気に入ったよ、神目帯君。名前もなかなか優雅だし」

「はあ」

としか言葉が出ない。確かに珍しい苗字<sup>みなうじ</sup>だとは思いうけれど。

「神目帯というのはね、シソ科の植物の名前なんだよ。別名ホーリーバジルとも呼ばれていて、抗酸化作用の高いハーブとして重宝されているんだ。不老不死の霊薬とも言われているね」

「へえ」

自分の苗字だけど、それは知らなかった。どうせどこか辺境にある地名か何かだと思っていた。まさか植物の名前だったとは。

「これは私の自説だけどね、植物の名前が苗字に入っている人間に悪い奴はいないのさ。私の紅葉<sup>しか</sup>然り、君の神目帯然りね」

「あ、あのう……」

丸縁メガネの女性がおずおずと手を挙げる。

「私はどうでしょうか？」

「君はほら、八重って単語が入ってるからね。おおむね大丈夫だ」

「やったあ！」

やったあなのか？ いやまあ、本人が嬉しいならそれでいいんだけど。

「というわけで、私独自の基準により神目帯君は悪い奴じゃない。よって犯人なわけではない！以上証明終了お疲れさまでしたー。さ、帰ろうか神目帯君」

「ちょっと待て」

案の定——というか当たり前のことだけど、榛原刑事が待ったをかける。

「まさかお前、そんなクソみたいな理由で最有力容疑者を連れてこうとしてんのか？ んでもってなんでお前もしれっと帰ろうとしてんだよ。座れ」

「すみません、無罪になったのかと思っつい」

「んなわけあるか、お前もまあまあとんでもないやつだな」

誉め言葉として受け取っていいのだろうか。あまり褒められた経験がないので、もしかしたら勘違いかもしれない。

「紅葉、お前ふざけんのもいい加減にしろよ」

「私はいつだって真剣ですが」

「俺らがお前みたいなちやらんばらんやつに付き合ってやってるのは、お前がそれなりに結果を残してるからだ。殺人事件、強盗事件、窃盗事件、その他もろもろ。癪だが、お前の知恵を借りた事件はことごとく解決してる。俺はなあ紅葉、お前の人間性は吐き気がするほど嫌いだ、知識だけは認めてるんだよ」

「あと署長が私のことを気に入っているからでしょう？ 署長に逆らったら、ますます出世の夢が遠ざかりますもんねえ。やーい、権威主義ー」

すごいなこの人。なんでこんなボンボン相手を煽るような言葉が出てくるんだ。安直な罵倒や罵声をあげていない分、一層破壊力が高い気がする。

「……一回だ。一回でも適当な情報で捜査を邪魔してみろ。捜査妨害でお前のことをしょっぱいてやる。それを肝に銘じて発言するんだな」

「こわいなあ、そんな顔して。私としては、警察の皆さんとはもつと仲良くやりたいんですけどねえ。まあ嘘ですけど」

紅葉さんはけだるげに笑うと、取調室の机によいしょと腰かけた。そうして長い足を優雅に組むと、さながら一枚の絵画のような光景がでかある。タイトルはなんだろう、「傍若

無人」とか？

「それじゃあ刑事さんも限界みたいだし、そろそろ証明するのでしょうか。君の無実を」

「そんなこと、できるんですか？」

自分で言うのもなんだが、状況はかなり悪いと思う。

僕のアリバイを証明できるものは一切ないし、死体を見つけても通報せず、のんきにスケッチをしていたという怪しい行動も取っている。名木田さんとは少なからず面識があったことも事実で、部屋の中に僕の痕跡が残ってしまったているのも痛手だ。

正直なところ、ここから無実を証明するのは難しいのではないかと思うのだけれど……

「愚問だね、そして余裕だ。君は十分後にはここを出て、外の空気の清々しさに感動してむせび泣いていることだろうさ。今のうちにシヤバに出た後、最初に食べたい物のことでも考えておくといい」

「すみません、まだ取調室に来て数時間なので、そこまでの感動的なリアクションは保証できないです」

「さて、刑事さん」

あ、多分あんまり人の話を聞かないタイプだな、この人。

「もう一度、このスケッチブックに描かれている花の絵をよおく確認してはもらえませんか



ねえ。名木田美鈴の部屋で描いたものではなく、彼が家の近くで描いたと証言していたこの花の絵。そう、それです。それこそが、彼の無実を証明するものなんですよ」

「バカバカしい」

と、吐き捨てるように言う榛原刑事。

「その件についてはすでに検討済みだ。そいつが絵を描いていたところを見たやつはいない。そして目撃証言がない以上、アリバイは成立しない。簡単な話だ」

「はっはあ、実は浅はかな推理ですねえ。浅すぎて浅すぎて、三歳児用の幼児プールが目の前に具現化したのかと思いましたよ」

「んだと!？」

「いいですか、重要なのはこの絵が『なんとという植物を』スケッチしたものかということですよ。待ってましたとばかりに紅葉さんがスケッチブックを指さして言う。

「この植物はミスミソウ、別名雪割草ゆきわりくさとも呼ばれる種です。春先、雪を割って花が咲く様子を表してそう呼ばれているようです。実に風流ですよねえ。そしてこの植物の面白いところは」

一拍。

「花の色、そして形が、咲くまで分からないところです」

「まさか」

と、萩刑事が口をはさんだ。

「花の形なんてどれも同じでしょう。ヒマワリとか、タンポポとか……大体全部同じような形をしているじゃないですか」

「悪くない指摘ですねえ、最高の合の手をありがとう萩刑事。無知な人間の質問は、解説の最高のスパイスです」

この人は他人と会話するときには一回は馬鹿にしないといけない契約でも結んでるのだろうか、神と。そして刑事の二人は慣れているのか、あまり深く追及せずに紅葉さんの話を聞いている。

いや——聞かされていると言った方が正しいのかもしれない。

紅葉さんの言葉と一挙手一投足には、聞き手を引き込む力があつた。

「野生のミスミソウは花弁の色、花弁の枚数、そして花弁に入っている『斑』<sup>はん</sup>の位置に至るまで、一つとして同じものはないですよ。例えば花の色は赤から青にかけてグラデーションにうつりかわり、花弁の枚数は六枚から八枚、九枚、時には幾重にも重なることさえある。その多様さゆえに園芸品種としても人気が高く、一昔前は一株数万円の高値で取引されていたこともあります。ここに来る前に、神目帯君がスケッチしていたというミスミソウを確認



してきました。これがその写真です。八重野君」

「は、はい！ これです！」

八重野さんが慌ててスマホをいじり、二人の刑事に画面を見せた。

そこには確かに、僕が今朝スケッチした花、ミスミソウが写っていた。

「これは……すごいですね」

「どうです、完璧でしょう？ 恐ろしいまでに完璧だ。特に花部の描写が抜群にうまい。まるで写真をトレースしたみたいだ。これが何を意味しているか分かりますか？ 二つとして同じものがないミスミソウの花の様子を、トレースのように描き上げた。これはつまり、彼が間違いない、事件現場から遠く離れたこのミスミソウをスケッチしていたというこの証左に他ならないんです。犯行現場で怪しい行動をしていようが、スケッチの速度が異常だろがそんなことは関係ないしどうでもいい。彼は事件当時、名木田美鈴の家にはいなかった。つまり彼に犯行は不可能なんです。違いますかあ、萩刑事？」

「それは――」

「おい、惑わされるなよ、萩」

榛原刑事が鋭く釘を刺すように言った。

「たとえそのなんと草が、花が咲くまで模様や形が分からないのだとしてもだ。んなもん、

数日前から咲いてたらいつでもスケッチできるだろうが。やっぱりアリバイにはならねえよ」

「いえいえ。家の人に確認しましたが、このミスミソウは昨日までは咲いていなかったですよ。この家のご主人はミスミソウの開花を心から楽しみにしておられたようで、毎日毎日写真を撮っていたそうです。ほら、これなんてちょうど昨日の日付」

「……なんで咲いてねえ花の写真まで何枚も撮ってんだよ」

「ミスミソウというのは種子から育てると、開花まで数年かかるんです。何年も何年も開花を待ち続け、発芽し、実生<sup>みしょう</sup>になり、花茎が立ち上がり、ようやく今年蕾を付けた！ それはもちろんが子の成長を見守る思いで、毎日写真を撮り続けても不思議じゃありません」

「だとしてもだ！ この写真は昨日の夕方に撮られてる！ 夜中の間にスケッチしてたかもしれないねえだろうが！」

「はっはっは、さすがベテラン榛原刑事、年を取りすぎたせいで小学生レベルの理科の知識も抜け落ちてしまっているようですねえ。最近の小学生の参考書は分かりやすいそうですから、一度学び直してはいかがですか？」

「……何が言いたい」

「簡単な話ですよ、榛原刑事。植物の花というのは、一部の種を除き、太陽の光を浴びなければ咲きません。このミスミソウも例に漏れずね」

花は、花粉を媒介してもらうための器官だ。派手な見た目で昆虫をおびき寄せ、種を繁栄させるために花粉をつけて飛んでいってもらう。そして主な昆虫の活動時間が日中である以上、開花の時間もまた、日中である。

そんなことを遠い昔に学んだのを、うつすらと思い出した。

「それにねえ、榛原刑事ご存じですか？ 花というのは、咲いたその日から徐々に劣化していくものなんですよ。特に早春に咲く花は傷みやすい。花卉の艶やかさ、雄蕊のみずみずしさ、そして花粉の付き具合からして、このミスミソウが今朝咲いたことは疑いようがありません。つまり、彼にアリバイがあることはゆるぎない事実なのですよ」

榛原刑事と荻刑事は、しばらく何も言わなかった。

二人してじつとスケッチブックを眺めたまま、口をつぐんでいる。おそらく僕が犯人である可能性を、紅葉さんの主張を加味したうえで再考しているのだろう。

やがて、榛原刑事の言葉を促すようにゆつくりと、荻刑事が口を開いた。

「榛原さん」

「ちっ……いったん釈放だな」

僕はただ、驚いていた。

何をどう話しても嘘としかとらえられず、客観的に見て最も怪しく、このままいけば嘘の

告白をしてしまいそうになるくらい絶望的な状況だったのに。

この人は植物の知識を使って、あつという間に僕を無実にしてしまったのだ。

つむじ風のように現れて、場をかき乱し、状況を一変させた。知識、手腕、能弁さ、そしてあふれんばかりの自信。そのすべてに、圧倒された。

「だけど忘れるなよ、神目帚。お前は容疑者リストから完全に外れたわけじゃねえ。あくまで今回は、証拠不十分で釈放っただけだ。それと、お前は最近の名木田美鈴の情報を知る貴重な人間だ。後日改めて話を聞かせてもらうからな」

「もちろんです」

ちゃんと聞いてもらえるのであれば、いくらでも話すつもりだった。僕の持っている情報が、捜査の役に立つかどうかは知らないけれど。

「上々だ。さあ帰ろうか、八重野君、神目帚君」

登場が突然なら、引き際も早い。気付けば僕は二人に連れられて、二度と出られないんじゃないかと思っていた取調室からあつという間に解放された。

外の空気がやけに美味しく感じる。むせび泣くほどではないけれど、どこか清々しかった。「あの、紅葉さん。それに八重野さん。今回は本当にありがとうございました。なんてお礼を言っているか……」

改めてお礼を言う。見ず知らずの僕のために、わざわざ出向いてくれたのだ。感謝してもしきれない。世の中には無償で人を助けることができる、心が清らかな人もいるんだな。最初に見た時、とんでもない対価を要求してくる悪魔に見えてしまった自分をぶん殴りたい気分だった。

この人たちの高潔な姿勢は僕には到底真似することはできないけれど、せめて感謝をこめて祈っておこう。

「お礼なんて結構だよ。私は君を助ける。君は私を助ける。ウィンウインの関係じゃないか」「ウィンウイン……?」

首をかしげる。いったいなんの話だ? 僕が紅葉さんの助けになるような話は、出ていなかったはずだけれど。僕が疑問符を浮かべていると、八重野さんがおそろおそろ問うてくる。「も、もしかして、聞いてないですか?」

「何をですか?」

「えーっと、そのお……」

「君のその高い植物のスケッチ能力を活かして、私の仕事の手伝いをして欲しいという話だよ。言わなかったか?」

「聞いてないですね」

「聞いてないそうさ。しっかりとしてくれたまえ、八重野君」

「えっ、また私ですか!」

絶対八重野さんのせいじゃないと思う。というか、やっぱり対価を要求されるじゃないか。しかも割と、重めのやつを。僕の第一印象に間違いはなかった。殴ってごめんな、過去の僕。

「あ、あの、どうでしょう……それなりにお手当も出ますし、一度だけでもお手伝いいたさないでしょうか……?」

八重野さんがおそろおそろ言う。

「いや、手伝うも何も……」

そもそも、何をすればいいのかすらピンと来ていない。

紅葉さんは確か、法医植物学者……とか言ってたな。初めて聞いた肩書だが、警察にもつながりがあるところを見ると、事件の調査を手伝ったりするのだろうか?

「ま、そういう反応になるのも致し方ないだろう。なんせ私は君に、法医植物学者としての実力の『し』の字も出していないのだから」

それを言うなら『法医』の『ほ』の字じゃないのか? なんで途中の『植物』からなんだよ。「というわけで、神目帯君、ちよっとうちの事務所まで付いてきたまえ。私の仕事について詳しく説明しようじゃないか。君が手伝ってくれるかどうかは、その後で判断すればいい。

「どうかな、悪い話じゃないと思うが」

「まあ、それなら……」

いいか、と思わず頷く。こういうの、ドア・イン・ザ・フェイスっていうんだっけ。大きな要求を最初にして、徐々に要求のレベルを下げていって相手に飲ませる心理学的手法。まんまと術中にはまった気分だが、あまり深くは考えないことにしよう。

「よし、決まりだな。全然関係ないが、ドア・イン・ザ・フェイスって言葉は、スタンリー・キューブリック監督の映画『シャイニング』のバックステージを彷彿させると思わないか？」

「アクロバティックな角度から僕の心を読まないでください。普通にびっくりします」

なんだか掌の上で踊らされている気がしなくもないけれど、助けてもらった恩もある。それなりに報いなければ、礼を失すると思うものだろう。僕は素直に諦めて、紅葉さんたちにについていくことにした。

どうせ家には帰りたくないし——ちょうどいい。

「さて、それでは事務所まで帰るとするか」

「やっぱりバイクですか？」

「いや、リムジンだが？」

その恰好でバイクじゃないんだ。しかもリムジンなんだ。リムジンで送迎される職業なん

で政治家くらいしか思いつかないんだけど。法医植物学者っていうのは、そんなに儲かるんだろうか？

「今、八重野君が車を回してくれてるところだ。私たちはのんびり待つとしよう」

でもってあの生活感あふれる人がリムジンの運転をするのか……想像つかないな。

いまだに状況の整理ができない僕が、ぼうつとした頭で宙を眺めていると、何を思ったのか紅葉さんが「気になるのかい？」と言う。

「何がですか？」

「とほけるなよ。気になるのも無理はないさ。彼らはこれから大変だろうからね」

「刑事さんたちが、ですか？」

「ああ。なんせ最有力候補の被疑者にアリバイがあつたんだ。捜査は振り出し、しばらくは寝る暇もないだろうね」

「……ちよつと待ってください」

一瞬、背筋に電撃が走ったように、体が硬直した。

今、この人なんて言つた？ 最有力の被疑者にアリバイがあつたから、捜査が振り出しに戻る？ なんだよ、それ……それじゃあまるで。

「まるで、犯人が別にいるみたいない方じゃないですか」

「何をいまさら。君が犯人じゃなかったんだから、他に犯人がいるに決まってるじゃないか」  
「そんなはずありません。おかしいですよ。だって彼女は——名木田さんは、自殺したんですよ？」

僕が彼女の部屋に入った時、彼女はすでに絶命していた。

洗面器に付けられた左手首からはおびただしい量の血が流れだしていて、すでに取り返しのつかない量の血が失われていることは明白だった。右手にはナイフが握られていて、べつとりと血が張りついていた。周囲には大小さまざまな鉢に植えられたワスレナグサが置いてあって、それはそれは見事に咲き誇っていた。

私は近日中に自殺する。

死ぬときはワスレナグサに囲まれて死のうと思う。

すべて、彼女が生前に言っていた通りだった。

だから——

「ああ、なるほど。君は彼女が本当に自殺したと思い込んでいたんだね。まったく、私の周りには純粋な人間が集まるね。類は友を呼ぶってやつかな。神目帯君、後学のためにこれだけは覚えておきたまえ」

紅葉さんは、口元に笑みをたたえて言う。

その赤く薄い唇からは、真実のみが語られる。そんな気がした。

「確かに彼らは愚鈍で不学で無知蒙昧で、自分の欲を優先したせいでこんな片田舎に飛ばされた二流三流の刑事かもしれないがね。それでも——それでもだ。自殺と他殺を間違えるほどの、大馬鹿者ではないんだよ」

ああ……そうか、そうなのか。

ずっと、気になっていることはあったんだ。

榛原刑事の言葉が脳裏に鮮明によみがえる。

『いいか、よく聞け。ガイシャの部屋からはてめえの痕跡がわんさか見つかったんだよ。指紋、毛髪、何かとペアでそろえた食器類。右手に握ったナイフからは、べつたりお前の指紋が検出されてる。自殺にでも見せかけようとしたんだろうが、処理が雑すぎんだよ。警察なめんなよボケが！』

僕の痕跡があるのはうなずける。僕は三か月前に彼女と出会ってから、少なくとも毎週月曜の朝には彼女の家を訪ねていた。死んでいるかどうか確認する、ただそれだけの作業のため。

けれど、彼女の部屋に自分の食器を持ち込んだ覚えはない、用意された覚えもない。そのペア食器は、僕のものではない。

つまり――

「いるよ、間違いない。彼女を殺した犯人が」

この事件は、まだ終わっていない。

## 第二章

あの夜、ペンライトを片手に描いていた植物の名前を、僕が知ることはもうないのだろう。大学二年生になった頃から、日が暮れても公園や河川敷かせんじきから離れないようになった。深い理由はない。ただ、家に帰りたくなかったのだ。

家の周りに巨大なN極の磁力をまとったバリアが張られていて、僕もまた、N極の磁力をまとった服を着ていて。近づけば近づくほど、撥ねはのけられる力は強くなって。やがて、反発する力に抵抗することすら億劫おっくうになって、僕は家から離れる合理的な理由を求めた。

外に滞在するための理由。

自分を納得させるための方便。

時間はかかれればかかるほどいい。できるだけ金銭を使わず、他人に関わらず、一人だけで完結できる、そんな趣味。

絵を描くという行為に行きつくまでに、そんなに時間はかからなかった。